
My Spotlight

神無月愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My Spotlight

【Nコード】

N6346Y

【作者名】

神無月愛

【あらすじ】

高校生デビューしたての栄&飛鳥の幼馴染コンビは、期待と不安を胸に私立女子高の演劇部に入部した。キャラの濃すぎる部員や友人達に囲まれたドタバタで愉快的部活ライフ！女ばかりだから恋愛色は無いけれど、こんな青春も良いんじゃない？

他サイトのブログで連載した作品を一部改定、編集したものです。ストーリー大筋は変えていませんが言い回し等はかなり変えてあります。

春 今日、はじまりの風が吹いた

私はたった一人、暗い舞台上に立っていた。

手を前に突き出せば指先が届きそうなほどの位置にある緞帳じゆとけいがするすると上がっていく。それにつられて、私の胸は早鐘のように高鳴る。

頭上のライトが点き、一歩前が眩しいくらい明るくなった。

目の前にある、キラキラ輝く華やかな空間。私は顔を上げ、その中央に一歩踏み出した。――

「さーかーえっ！あれ、寝てる。もう、部活行くよー？」

聞きなれた声が頭上で自分の名前を呼んでいるのが聞こえて、教室で机につつぷして居眠りしていた神谷栄かみやさかえはぼんやりと目を覚ました。午後の教室は日当たりが良く、廊下よりの席でも意外と眩しい。数回瞬きしてみたが、まだ頭が寝ぼけてる。

「まったくもー、部活行くよってば。さっちゃん起きて！おい、栄！」

いらついてきたのかだんだん大きくなる声。栄はゆっくりと頭を持ち上げた。

「何なんだよう……」

「部活初回から遅刻する気なのかっつーのよ莫迦バカ。」

セリフと同時に頭頂部に拳が降ってきて、せつかく持ち上げた頭は机にぶつかってごつんと鈍い音を立てた。

「痛あ！」

「わあ、すごい音。」

栄の悲鳴に、相手は悪びれる様子もなく平然と言う。さすがに堪りかねて、額を押さえてキツと相手の顔を睨んだ。

「何すんだよ飛鳥あすか！」

「あ、起きたあ。」

満面の笑みでそんなことをたまったのは、隣のクラスの西原飛鳥。小動物を思わせる細面な顔に大きめの瞳、小柄で色白、肩にふんわり掛かる黒髪と、少女マンガに出てきそうな可憐で儂げな外見の女の子だ。しかし親しくなればなるほどそんな第一印象と遠ざかっていくような性格の持ち主だった。栄は一度だって飛鳥のことを儂げだなんて思ったことはない。栄と飛鳥は家が隣同士で、物心ついた頃からの幼馴染なのだから。

「ほら行くよ、準備して。大体これから部活行くつてのに本気寝しないよね。」

声も高めで女の子らしい。男になら文句さえも可愛く聞こえるんだろうな、なんてチラツと思った。

栄はそんな幼馴染とはまったく似ていない。そんなに男っぽいという程ではないがショートヘアに太めの眉、太つてもいないが痩せている訳でもなく、顔立ちなどもまあ平凡だと言えた。ただ飛鳥と比較されるのと少々喧嘩っ早い性格の所為で男っぽいなどと言われるのだろう。もともと栄自身、自分を女らしいと思ったことがないのだが。

二人が喋っていると、栄のクラスメイトの一人がひょいと顔を出した。

「あれっ、あーちゃん！えいちゃんと知り合いだったんだ。」

「志茂ちゃん。飛鳥のこと知ってたの？」

栄はちよつと驚いて答える。にっこりと頷いた彼女は、栄の隣の席の志茂安芸子^{あきこ}。高校に入った初日に栄に話し掛けてきてくれた子だった。長い黒髪は綺麗で真っ直ぐで、ふくよかな笑顔はどこか日本人形を思わせる。和服なんか着せたら似合いそうだ。

「安芸ちゃん。そっか、このクラスだったね。」

飛鳥が彼女のほうを振り返った。なんだか妙に楽しそう。そして事情説明を求める栄の視線に気付いて双方に紹介するように言った。

「安芸ちゃんは中学で三年間同じ委員会、栄は幼稚園も小学校も同じ幼馴染なの。すごいなー、お互い知らなかったのに友達になっ

たなんて。なんか縁あるのかもね。」

ふふつと笑う飛鳥。栄はふーんと相槌あいづちだけ打って聞き流した。

「飛鳥、お待たせ。行こつか。志茂ちゃん、また明日ね。」

「うん、私は帰るね。部活がんばって。」

笑顔で手を振る安芸子に見送られて、二人は並んで歩き出した。

部室に向かって歩いていている途中、ちょうど中央階段の近くを通りかかった時だった。

「おーい、栄じゃないか！ 久し振り！」

唐突にそんな大声が聞こえ、振り向く間もなく後ろから抱き付けられた。でも、誰だかは声で分かる。

「か、華奈先輩かな！？」

「おう！ ようこそ宮高みやこうへ！」

キラッキラの明るい笑顔が、かなり高い位置から二人を見下ろしていた。こうしていると、この笑顔が太陽に例えられるのも分かる。

華奈先輩——十条華奈じゅうじょう かなは二人の小学校、栄の中学校の先輩で一つ年上。ちなみに栄は小学生バスケットチームでもお世話になった仲だった。身長160センチ弱ある栄よりさらに20センチばかり高いバスケット部のエースだ。今も宮高バスケット部と書かれたユニフォームに身を包んでいる。宮高というのはここ、私立宮ヶ丘みやがおか女子高校の略称だ。

「わあ、お久し振りです！ 私のことも覚えていらっしやいます？」

「もっちゃんよ、飛鳥ちゃんですよ。小学校卒業以来だから、四年ぶり？ 懐かしいなあ。」

そう言って二人の肩を同時に痛いくらいぽんと叩く。

「二人とももう部活決めたでしょ。どこにした？」

「演劇部です、中学と同じく。」

笑顔で答えた栄に華奈はそっか、と呟いた。なんだか妙に嬉しそうだ。

「うわー、楽しみだな。観みに行くからさ。あ、そうだ、部長たちにはもう会ったの？」

「いえ、今日、今から初回なので……」

どうしてそんなコト聞くんだろう、と飛鳥がきよんとして答えると、華奈はいっそうニコニコして言う。

「そうかー、じゃあ会うの楽しみにしてな。あいつらとは知り合いなんだけど、何て言うか、すごい奴らだから。」

いつになくもったいぶって言う。二人が顔を見合わせていると、腕時計をチラッと見た。

「あ、やっべ。部活行かなきゃ。あんた達も遅れないように行けよ。」

「そう言って二人が返事する間もなくダッシュで行ってしまった。しはしポカンとした後、二人はやっと我に返って駆け出した。きっと何かが二人を待っている、宮ヶ丘女子高演劇部へ。」

春 今日、はじまりの風が吹いた（後書き）

初めまして、綾瀬愛那と申します。

プロローグの段階であとがきというのも変な気はいたしますが、ちよつと書きたいことがあつてペンを取り…いや、キーボードを叩きました。

まず、お読みいただき誠にありがとうございます。なにぶん小説投稿は初心者ですので拙い部分も多々あるとは存じますが、大目に見ていただければ幸いです。

それと、この小説の続きですが、少々お待ちいただく事になるのではないかと先にお断りしておきます。

作者は遅筆で、おまけに学生という身分のため執筆に十分な時間を割けずにあります。これはひとえに私が不器用だという話なのですが、それでも続きを気長に待つてくださる方がいらつしやいましたら作者にとってこれ以上嬉しい事はございません。

では。この栄と飛鳥たちの物語がもしあなたのお気に召しましたなら、またいつかお目にかかりましょう。

第一場 新緑。その中で、小さな波乱の予感がした。

高校校舎と付属中学の校舎の間に挟まれて立つ二階建ての建物、通称部室棟^{ぶしつとう}。高校側の入り口から入って三つ目の部屋、やや色褪せた茶色いドアの前で、二人は足を止めた。目線の高さに掛けられた「演劇部」の札をもう一度確認。一つ大きく深呼吸をしてから、柴はそつとノックする。中から返事が聞こえるのを待って、一息にドアを開けた。

「失礼します！」

中にいた部員七人の視線が一斉に集まるのを感じて、二人ともさすがに怯む。と、奥のほうにいた一人がひらひらと手を振って言った。「あ、新入部員の一年生？まだ部長も副部も来てないから、どうか適当な席に座るときな。」

彼女はどうかやら上級生らしい。ショートヘアで、綺麗なハスキーボイスに口調も男っぽい。男役を演じたらきつと素敵だろう。軽く会釈して近くの席に着いた。すると、やはり奥の方に固まって座っていた上級生の一人が座っている椅子を引きずってやって来た。笑顔で二人に話し掛ける。

「二人は、舞台とか経験あるの？他の一年生の子達は初めてらしいけど。」

この様子だと、全員に聞いて回つたらしい。二人が頷くと、嬉しそうになつこりと笑った。うん、なかなかの美少女。飛鳥よりやや長い——胸くらいまである髪を二つに分けて耳の後ろで結んでいる。しかもショッキングピンクの太ゴムで。派手なヘアアクセサリーは禁止だけどゴムの色まで指定はないから、校則違反ではないけど口うるさい先生だと危ないというギリギリラインか。ささやかなオシヤレだ。とっても女の子らしい。

「よかった、経験者増えて。二年生もあたしともう一人は新人だし、心配だったの。」

それを聞いて栄は改めて周りの部員たちを見回してみた。上履きの色からして、一年生が自分たち含めて5人に二年生が4人で、部長と副部長が来るとしても全部で11人。それに、本来ならまだ引退していない筈の三年生の姿もない。

この部、去年はどうやって活動してたんだろう？ 栄の脳裏に当然とも言える疑問が浮かんだ。

栄が辺りを見回したからだろう、彼女はふと気づいて言った。

「あつ、そうそう。あたし**こまきょうか** 狛江京花。あの男みたいなのが礼子で、あの子が北沢さん、そんであのちっちゃいのが七波**ななみ**つて言つて、あたしと同じ新人。今いる二年生はこんなもんかな。」

一息で全員分の自己紹介を済ませてしまう。ある意味すごい。指差しただけであの子呼ばわりだった人をまとめると、さっき二人に声をかけた背の高そうなイケメンが礼子先輩、一番窓際の端に座っている超ロング三つ編**み**の美女が北沢先輩、小柄で短めの髪をうなじでしっぽにしているのが七波先輩。私も一応自己紹介したほうがいいのかな？ と栄と飛鳥が目を見合わせた時、ガラスと勢いよくドアが開いた。

「お待たせー！ 遅くなってごめんね諸君！」

いやに軽い口調でそんなことを言いながら入ってきた二人組。一言でいうと、かなりの美人だった。

二人とも二年生で、おそらくさっき礼子が言っていた部長と副部長だろう。と思つたら即興で作つたらしい紙の名札を着けていた。叫んだのは部長。やや茶つぽい髪は腰まで届くかというほど長い。副部長は漆黒のショートヘアで、一見すると男女ペアのように見えなくもない。ただ、二人とも全く同じと言つていいほどよく似た顔立ちだった。

「遅い。」

礼子のもものすごく不機嫌そうな低い声を軽く無視して、部長は教壇に上つて教卓に両手を置いた。副部長は腕を組んで閉めたドアにもたれ、部室の中を見渡す。

「さて早速だけど、今日は新しく入った一年生に自己紹介でもしてもらおうかなと思います。でもその前に二年生からね。」

部長の言葉で、先にいた4人から順に学年と名前を言っていく。栄達はそれでやっと狛江京花以外のフルネームを知った。相模礼子、北沢奈々、町田七波というらしい。最後に、副部長が部長の隣りに立って口を開く。

「白金月香しろかねつきがです。一年間副部長をやらせてもらうから、よろしく。」

「そして私が、部長の白金雪穂ゆきは。二年生は知ってると思うけど、月香と私は二卵性双生児なの。」

なるほど、道理でそっくりな訳だ。そして部長は何気なくこっちに目を向けた。視線が合ってしまう。

「じゃあ、次は一年生ね。そっちからよろしく。」

そして綺麗にウインクまで投げてよこす。ここまでされてしまったのは断れないので立ち上がり、緊張のあまり声が震えそうになるのを必死に堪えながら自己紹介する。

「一年D組の神谷栄です。よろしくお願いします。」

栄に続いて飛鳥も立ちあがる。こちらは露骨に声が震えてしまっていた。

「C組の西原飛鳥です。よろしくお願いします。」

そして座ってほーっと大きく息をつく。栄はそれを小突き、小声で聞いてやった。

「どうしたんだよ、いつもの舞台度胸はどこ行っただ？」

飛鳥は栄をキッと睨み、さらに小さな声で真剣に言った。

「栄、月香先輩ってすごくカッコいいと思わない？」

「は？」

「立った瞬間、目が合っちゃって。一瞬で頭真っ白になっちゃったの。」

ああそうですか。栄は呆れ返って適当に返事をした。飛鳥が面食いで惚れっぽいのは今始まった事じゃないが、女子中学に行ってからその対象がいつの間にか女性にシフトしているようだ。

二人に続いて、ほかの一年生も緊張しながら自己紹介をしていく。最後に一番端に一人で座っていたポニーテールガールが勢いよく立ち上がった。

「一年A組、戸塚美園としかみそのです。よろしくお願い致します。」

凜とした声で言い、すくと腰をおろす。その次の瞬間なぜか振り返り、栄と視線が合った。

二人はしばし睨み合う。そのうち、美園はふいと顔をそむけた。

（何なんだよ、今の…）

あまりの鋭い視線に、思わず睨み返してしまった。けど、本当はそこは何事もないような涼しい顔でにこやかに会釈でもすべきだったかも知れない。そう思い当たったのはしばらく後だった。

それに気付いているのかいないのか、部長はちらつとこちらを見ただけで話を続ける。

「これで全部員、11人での活動になります。見ての通り人数は多くないから、一年生も当然舞台に立つてもらうわ。もちろん一番の大舞台は文化祭だけど、その前にも七月公演があるからそのつもりでね。」

先輩のお言葉の間も栄が考え込んでるのが分かったのか、飛鳥がこそつと囁く。

「何してんの？初日からいざこざ起こさないでよね。」

そんなの知らない、あっちが睨んできたんだと言い返そうとしたが、それを無視して飛鳥は前を向いてしまった。栄はふうつとため息をついて、自力で考えを巡らせ始めた。

「戸塚美園？中学三年間同じクラスだったから知ってるけど…あの子、今度は何やらかしたの？」

翌朝一番、栄は入ったばかりの文芸部に提出するための原稿に熱中していた安芸子あきこに声をかけた。美園の名前を出した途端、彼女は露骨にいやな顔をした。

「やらかしたって…問題児か何かなのかよ。」

冗談だろうと思ってなかば呆れたように言う。安芸子は興味なさげに首を振った。

「いや、まあそういう意味で言えば普通の子。」

「じゃあ、どんな子？」

そう尋ねると、安芸子は待ってましたとばかりに一息で言った。

「自己中^{ジコチュウ}で自信過剰で自分は何でも出来ると思ってるバカ。」

「……仲悪かったんだね？」

安芸子はふんと鼻を鳴らして言い足す。

「めちやくちゃ、ね。当然でしょ。あのタイプと私と気が合うと思う？」

「思わない。」

栄は思わず即答する。先日あるクラスメイトに日本人形風美人などと言う変な形容をされていたほど物静かでおしとやかで大人しく見える顔立ち、そして普段はそれに合う笑顔を絶えず浮かべている安芸子。しかしやはり人は見かけによらないものらしく、にこやかな仮面の裏にはかなり執念深く腹黒いものがあるというのを栄には仄^{ほの}かに見せるようになっていた。まあそれだけ心を許されているという事だろうか。まだ他のクラスメイトの前では完全に猫かぶったままにいるつもりらしい。今回のキツイ台詞^{せりふ}も、栄にしか聞こえない小声で発されている。

「私は関わり合いにならないように気をつけてたから、積極的に喋った事はないな。……ん？待てよ、本気で口きいた事ないかも。特に用もなかったし。イジメっぽい^{いじめっぽい}のされそうになった事もあったけど、相手にしなかったら向こうが折れた。」

「……。」

さすがは飛鳥の親友だ。真っ先に栄はそんな感想を抱いた。類は友を呼ぶというのは本当らしい。そして、

「やつほー、栄いる？」

なんだか見計らったようなタイミングで教室の入り口に飛鳥がひよいっと顔を出した。まさしく噂をすれば影。二人を見つけてちょ

こちよこと小走りで寄って来る小柄な少女を見て、安芸子がひゅつと口笛を吹いた。

「さすが姫。マンガだったら背景に小花が散ってるね。」

「何言ってるんの安芸ちゃん。」

流石に飛鳥は慣れたもので軽く流す。近くの椅子を勝手に引つ張ってきて、自分の椅子を横に向けた栄と同じように安芸子の席の脇に腰を下ろした。

「で？二人とも、何の話してたの？」

「昨日のアレ。」

栄が一言だけ言うと飛鳥は当然分かったらしい。ただ、ああ、と頷いた。

「戸塚さんね。ねえ安芸ちゃん、あれ何だと思う？」

「何と言われても…私はただ、あの子がどんな子が聞かれただけよ。あいつ何したの？」

困り顔で安芸子が言うと、飛鳥は顔に似合わない事をすらつと答えた。

「簡単に言うと、ガン飛ばしてきた。」

「ほんとに顔と台詞の噛み合わない娘だなこいつは…」

栄は呆れて聞こえないような声で呟く。これこそ、人は見かけによらないの具体例。小さい頃から小柄で可愛らしく弱々しい外見だった所為で苛められた事も多いものの、お陰で慣れてしまったのかイジメを上手くあしらうスキルを身に付けている。安芸子から聞いた話では、中一の時苛めようとした相手を返り討ちにしたらしい。どんな手段でかは知らないし、知りたくもないけど。

栄の台詞が聞こえなかった筈はないが軽く無視して、飛鳥は安芸子の顔を覗き込んで少々わざとらしく小首を傾げてみせる。安芸子は妙に納得顔で頷いた。

「なあるほど。まあそんなこつたろうとは思ってたけどさ。で、その視線の先にいたのはどっちよ？」

「私だけど…」

栄がおずおずと答える。と、安芸子はぴくつと眉をあげた。

「え、そうなの？ そりゃ意外だ。あーちゃんだと思ってたのに。あの子、いつの間にキャラ変える気になったのかしら？」

「どういう事？」

今度は本当に意味が分からなかったらしく、素^すできよんとした飛鳥。安芸子はそれをまっすぐ見つめて訳知り顔で説明を始める。

「あーちゃん、あの子が中学でダンス部に入ってたのは知ってるよね？」

「うん。」

「あの子の目指すのってどっちかってとアイドル路線、可愛い方向だったみたいなのよ。何て言うかさあ、うちの学校じゃ浮くくらい『今ドキ！』って感じのかわいい子ぶった格好してたじゃない。ダンス部の中でも特に。だから、ライバル視するならあーちゃんかなあと思っただ訳。」

一瞬、栄と飛鳥は何の事かと互いの顔を見合わせ、同時に安芸子へ向き直った。

「何でわたし？ わたし別に可愛い子キャラ狙ってないわよ？」

「いやいやいや、何でアイドル目指して飛鳥がライバルなんだよ。」

飛鳥と栄が同時にツッコむ。安芸子は呆れ返ったように二人を交互に見、肩をすくめた。

「これだからこの幼馴染^{おさななじみ}コンビは…何も分かってないね。本人がどう思ってるかなんかこの場合問題じゃないの、あっちが勝手に思い込んでるだけなんだから。それにね、いい？ あーちゃんほか・わ・い・い・の！ あーちゃん、自覚してないとは言わせないし謙遜も無用よ。」

飛鳥が口を挟むより早く手と言葉でそれを制する。伊達^{だて}に三年間一緒にいた訳じゃないらしいな、扱いが手馴れている。押し黙った飛鳥に満足したのか、安芸子は背もたれに寄りかかって独り言のような調子で言った。

「あの子もなあ、どうしてこの学校に来たのかなあ。そもそもあん

な性格だと女子校に来たのが間違いの元、ってか悲劇の始まりだったって気もしたんだけどねー。」

それはそうかも知れない。栄も飛鳥も頷いた。と、安芸子は急に我に返ったようにハツとした。

「つと、違う違う。今の問題はそれじゃないんだ、相手はあーちゃんじゃなくてえいちゃんだから。ま、それならそれで問題ない気もするけどね。えいちゃんてば素直にイジメられる様な奴じゃないし、それ以前に鈍そうだし。」

「あのな。」

「あーちゃんも気を付けなよ？ セットで見られたらとばっちり食らうかも。」

「わたし？」

飛鳥はきよんとする。今度のはちよつとわざとらしい。そして、飛鳥はにつこりといやに力を込めた笑顔で言った。

「あら、わたしなら大丈夫よお。打たれ強いもん。経験値あるしね。」

「…あつそう。」

その言葉は確かに本当なので、安芸子も栄も何も言えなくなる。その時ちようどチャイムが鳴って、飛鳥は立ち上がると大げさなほど優雅にお辞儀をして隣の教室へ帰っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6346y/>

My Spotlight

2011年12月3日19時50分発行